

---

# 黒の猫

万葉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

黒の猫

### 【Nコード】

N29270

### 【作者名】

万葉

### 【あらすじ】

王都中のペットが人型になってしまった！さあ大変、警備隊長であるヴォルは原因の解明に奔走し、彼のペットのルーは人間ライフを満喫しようとして心に決める。仕事人間だけど、不器用優しい男とマイペースな元猫ちゃんのすてきらいふ

## 言えない気持ち

黒い猫の上に乗る手の重さが増す、先程まで撫でていた手は動くことをやめている。

膝の上で丸まっていた小さな黒い猫は主を見上げた。

暖炉の火は小さく揺れている。夜はもう深くなり始めている。

穏やかに休息をとっている表情を確認したかのように

黒い猫はそっと、主の膝から滑り降りる。

(ヴォルを起こさないように…。)

黒い猫が膝から居なくなっても主はすやすやと眠っている。

さらに距離が離れた主の表情を見上げ、黒い猫は静かに部屋から出ていく。

廊下に出るとすぐ目の前に階段がある。とことこと階段をのぼり、

少しだけ隙間から光が漏れるドアに入る。

机に向かってペンを走らせている若い男性が居る。大きなため息をつきコーヒーを手に取るうとした時

黒い猫に彼は気がついた。

「ルー、ヴォルさんはまた椅子で眠ったのかい？」

困ったように、微笑みながら彼は黒い猫に向かって言った。

椅子から立ち上がり、ルーを抱き上げて「お前はほんとに主思いの猫だなあ」

頭を撫でて、ルーを見た。

彼はそのまま階段を下りて、主がいる部屋の隣の寝室から毛布を取り椅子に寝ている主にかけた。

そつと、扉を閉めた後

「お前が居るからヴォルさんは風邪をひかない。」

背中をとことこ付いてきていたルーに彼は言った。

「最近は、忙しすぎるんだ。」コーヒーが冷めてしまったと彼は独り言のように

呟きながら階段を上がって行った。

黒い猫は、廊下にある自分の寢床に収まる。

うとうとしかけたぐらいに風を感じた。(?)

秋を少し過ぎたぐらいだが、夜は冷える。寢床から抜け出て、廊下の窓に黒い猫はそろそろと近寄る。

ふと、窓を見上げると赤い月が出ていた。

夕陽のようなオレンジに近い赤い月だった。見とれてしまうような美しい色だった。

少し、開いていた窓を体で押して締めて黒い猫はそのまま月を見ながら眠りに落ちた。

## 始まりの朝

「んん、…。」朝日が窓から差し込んでいる。  
どうやらまた椅子で寝てしまったようだ。

ヴォルは掛けてある毛布を持って部屋を出た。

自分の寝室にこれを戻してから二階で寝ているレッカを起こさないように

紅茶を飲むつもりだったのだ。

ふと、視線を落とすと寢床にルーが居ない。目線をあげ猫を探そうとしたがその前に違うものを見つけた。

窓の下でうずくまるように眠っている小柄な女がそこにいた。  
顔は見えないが黒いワンピースを着ている。長い黒髪が顔を隠してしまっている。

黒い猫は夢を見ていた。温かいオレンジの月の光に包まれて幸せな気持ちでいる夢を、

しかし突然抱き上げられて目が覚めてしまった。

「まだ、寝ていたいよ…。」

「とりあえずおまえは誰だ。」上から降ってきた言葉は主であるヴ

オルの声

寝ぼけながら、

「ルーだよ…。主がヴォルのルー・レズティン」最後まで言い切った後、

聞き覚えのない自分の声に目が覚めた。というよりも我に返った。

「私のルーは猫のはずだ。本当にルーなのか？」

「え？」自分のつやつやとした毛の代わりに小さな人の手が見えた。握ったり開いたりを繰り返し、そして、誰かに抱かれている現状を理解した。

そつと窺うように抱いている男を見ると不審なまなざしでルーを見下ろすヴォルの顔があった。

ヴォルに似ているけどこんな色は知らない。確かに彼の顔は男らしい精悍な顔つきだったが

こんなに緑な髪の色ではなかったはずだ。

「ヴォルの髪の毛は黒じゃなかったの？」思わず口から言葉が出てしまった。

「俺はもともと緑色の髪をしている。」

俺を見上げた時の女の顔は少女のようだった。オレンジに近い目の色に黒い髪が似合っていた。

単純に美しい人形のようにだと思った。しかし、ここは王都を守護する騎士団の本拠地である。

この女が得体のしれないものならば、それを暴き場合によっては処分しなければならぬ。

「猫が人になるなんてそんなことは聞いたことがない。」



だって猫だもん。

「私だって知らないよ。でも、ヴォルのルーだもん。」少女は少しだけむっとしたような表情でヴォルを見る。

二人の間で火花のような…ものが散った。

剣呑な空気を消し去るかのように

「隊長、起きられましたか？」レッカが階段を下りてきた。

がちやりと扉を開けると、「なにか問題でも起きたのですか？」

少しだけびっくりしたような表情で二人を見つめた後、言った。

「不法侵入者だ。だが、ルーかもしれない。」「ルーなのに…お腹すいたよレッカ…」二人の声は重なる。

…。一瞬の沈黙

「とりあえず、そのお嬢さんをおろしてあげてはどうでしょうか？朝ご飯を食べてから色々と話し合うことにしましょう。」

「しかし、重要な書類を持っていかれたり、破壊されたりされては困る。スパイかもしれないんだぞ。」

「隊長の力があれば捕獲もたやすいでしょう。私は冷めた朝食を召し上がってもらいたくはないのです。」

「ねえレツカ、私のミルクは冷たい方がいいのだけど…。」「二人の男は一瞬ぎよっとした。ルー、もといヴォルの愛しい猫は熱い食べ物に苦手なのだ。」

「それから、ヴォル？逃げないから下ろして？ずっと抱かれていますのは落ち着かないの。」「困ったようにオレンジの瞳をうるうるとしながらヴォルに向ける。

しびしび、ヴォルは華奢な少女を床に下ろした。そして短い言葉を言いながら少女の手を握った。

その手を離し、さつさとテーブルのある部屋に移動してしまった。

もうすでに移動していたレツカがさわやかに

「朝食にしましょうか。」「声をかけると

レツカはてきぱきとテーブルにコーヒーや、パンやスープを並べていく。

「昨日まで言えなかったけど、レツカってヴォルの奥さんみたいよね？」「

まあ猫だったから人との会話なんてありもしないんだけど…。

「隊長はほっておくと何にも食べないで仕事をするような人ですから私のようなものがそばで仕事をする方が管理が来ていいのですよ。毎日見てたんですか？」「

「だって、猫だもの。貴方達の行動はよく見てるわよ。とっても大好きだから」

嘘偽りのない柔らかな微笑み

「そうでしたね。あなたはルーなんですよ？昨日私が言った言葉覚えてますか？」

ん？つと首をかしげながら「コーヒーが冷めてしまった？よね。」  
ルーはレツカに答えた。

その返事にレツカは少しだけ目を輝かせて

「隊長！」席について書類を読みながらコーヒーを飲む彼にレツカは伝えた。

「報告です。王都の動物が今朝から人に変化したという報告が上がつてきています。」

「ありえないな…。」と言いながら彼のコーヒーはカップが傾いたことよってこぼれ始めていた。

「ねえヴォル？大事な書類が読めなくなるよ？」きよるん といった効果音がつきそんな声音でルーはヴォルを嬉しそうに見つめた。

\*\*\*ルー内心\*\*\*

今朝からどうやら人型になってしまった。どうにもこうにもよく分らない。

人の手の感覚は慣れない。視界が随分と昨日と違う。戸惑いは隠してるけど本当はたくさんある。

ヴォルとレツカに信用してもらわないといけない気がする。二人とも私の大好きな飼い主…

今は飼い主って言葉おかしいのかしら…鏡があれば姿を確認できるのに。

いつになく動揺しているヴォルは珍しいわ。ちょっとおもしろい。

「午後から緊急の会議を開くことにした。各自被害状況の確認に町に出てくれ。」

市庁舎の前で、集められた兵たちに向かいヴォルファービンは告げた。

いったい何が起こったんだ！どうということなんだ。

内心焦りながら、人前に立つ身の上そういった感情は押し殺して物事をすすめなければいけない。

王都は異様な雰囲気だった。

ペットを中心に動物たちが人型になっているのだ。しかも、それ相應の知識をすべての動物は持っている。会話もとれる。飼い主たちに従順なものも多い。

混乱の中、原因の解明と人型のペットは人間として扱うべきか否かについての法令の制定、それに向けての調査が一刻も争う仕事なのだ。

また仕事が増えた。……。ムスツとした表情が少しだけでてしまったらしい。

「隊長：しわ、しわよってますよ？ほがらかにほがらかに。」

レッカはいつもマイペースな男だ。この凶太さが俺にもほしいか思っているか

「ヴォルは私の主だから瞳が緑に見えるのかなあ〜」レッカの後ろからひよっこり

家に置いてきたルーが現れた。

「ねえヴォル？魔王様が弱ってるんだって。そこの魔蝶が教えてくれたよ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2927o/>

---

黒の猫

2010年11月20日02時34分発行